

わたしよりも優れた方が

今朝、わたしたちに与えられていますルカによる福音書2章の洗礼者ヨハネの活躍は、このところずっと取り上げているルカにのみ記載がある特殊記事ではありません。マタイにもマルコにもこの記事があります。いちばん最初に書かれた福音書であるマルコは、この洗礼者ヨハネの活動から福音書を起こしています。マタイによる福音書も最初にイエスの系図、つづいてクリスマスの出来事を記したのち、この洗礼者ヨハネが荒野に叫ぶ声として道備えをしたことを記しています。このふたつの福音書の記事とルカのものとはまず単純に分量を比べてみますと、ルカはオリジナルのマルコが1章1～8節と8節分の記述、マタイが3章1～12節と12節分の記述なのに対して、3章1～20節と20節分と、単純な比較はできないものの大幅な拡張を行っています。マタイとルカは、マルコが省略した洗礼者ヨハネの説教の内容に触れています。それでマルコよりもだいぶ分量が増えているのですね。そしてマタイとルカの分量の差は、ルカが洗礼者ヨハネが活躍した時代の周辺状況を事細かく記したからです。これはユダヤ人向けに書かれたふたつの福音書とは明らかに違うルカならではの視点です。3章1～2節は次のように語ります。「皇帝ティベリウスの治世の第15年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポが、イトラヤとトラコン地方の領主、サニアがアヒレネの領主、アンナスとカイアファが大祭司であったとき、神の言葉が荒野でザカリアの子ヨハネに降った。」とあります。ルカは主イエスの誕生を記した箇所でも時代を厳しく特定します。「その頃、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に登録をせよとの勅令が出た。これはキリニウスがシリア州の総督で

あったとき」と記していました。「いずれの御時にか」と始まるのは源氏物語、「むかしむかしあるところに」と始まるのが昔話の定番ですが、そういう、いつ、どこで、始まったか定かではない、どこかの場所、ではなく、人間のすまうこの歴史世界のただなかに神の子が来られ、神が働き始める。福音書記者ルカははっきりとわたしたちの生きている歴史の現場に神の業が働くこと、わたしたちの生きるこの世界は神の救いの歴史の舞台であることを宣言します。人間だけで、この世界が回っているのではない。はっきりとした意志をもって神の国をわたしたちの日常に接続するのです。当時のユダヤの地方行政の区画の担当者まで名をあげています。このルカ福音書3章の「洗礼者ヨハネを宣べる」を今日風に言い換えますと「天皇徳仁（なるひと）の即位4年、内閣総理大臣が岸田文雄の時代、愛知県知事が大村秀章（ひであき）、半田市長が久世孝宏の時代、牧師が横山良樹と横山ゆずりの時に、神の言葉がヨハネに降った」という感じですね。ルカは、このことを最初にきちんと記すのです。これはちょっと話が脇にそれるようですが瀬戸市にある瀬戸永泉教会の125周年記念礼拝の説教者を数年前にしたのですが、そのときに頂いた永泉教会の125周年記念誌をみて個人的に一番感動したのが、1930年から現代まで毎日曜日の聖書箇所と説教題が一覧になった頁でした。これはなかなか壮観でした。あのときもこのときも休むことなく講壇から御言葉が瀬戸の街に語られ続けた。同じことがいまここで起きているのです。神の霊が教会に降り、礼拝が引き起こされる。御言葉のうちに神が働かれる。それがいまの、この時代の、この日の出来事であることを福音書記者ルカは言うのです。まさにインマヌエル、神がわたしたちと共におられることを当時の為政者をきちんと記すことで明らかにする。こういう書き方は

地中海世界の読者にとっても有効だったでしょう。神の恵みの支配からもれた地はなく、救いがこの世界に来ていることの宣言がされているのです。

さて福音書記者ルカは 4 章に荒野の誘惑をおきますから、そこからイエス様の公生涯が始まってゆく。3 章までが言うならばイエス様の活動の序文というか、プロローグです。そしてルカはそれをバプテスマのヨハネとキリスト・イエスを交互に対比させるかたちでシンメトリーに配置して語ってきました。ザカリアへのヨハネの受胎告知、マリアへのイエスの受胎告知、マリアとエリザベトの出会い、洗礼者ヨハネの誕生、イエス・キリストの誕生、神殿での奉獻（幼子イエス）、神殿への巡礼（少年イエス）を描き、洗礼者ヨハネの活動、イエスがヨハネから洗礼を受ける、という流れです。そこで今日の箇所ですが、まず洗礼者ヨハネは荒野で成長しています。これはイエス様がナザレで両親に仕えて過ごされたのと対称的です。洗礼者ヨハネには旧約聖書以来の預言者の伝統が息づいています。実際ルカは、あまり旧約聖書からの引用を他の福音書記者のようにはしないのですが、ここではイザヤ書から「荒野で叫ぶ者の声がある。主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。谷はすべて埋められ、山と丘はみな低くされる。曲がった道はまっすぐに。でこぼこの道は平らになり、人は皆、神の救いを仰ぎ見る」という御言葉を洗礼者ヨハネの活動に重ね合せています。わたしは、この洗礼者ヨハネが荒野で少年時代から育ち、ユダヤが荒野と接するきわで悔い改めの洗礼運動を展開したところにイエス様との働きの違いがあると思うのです。荒野は人間が住まう場所ではありません。実際、エジプトを脱出してシナイ半島の荒野を 40 年間さまよったとき、イスラエルの民は水も食べ物もなく、不平を呟きました。神が天からの

パンであるマナをもって養いましたが、肉が食べたい、ニラが食べたい、エジプトに居た時はあれも食べた、これも食べたと愚痴る始末です。昼は灼熱、夜は厳しい寒さ、生き死にが問題になる過酷な条件の場所であるゆえに、神の助けなくば荒野では生きられませんでした。人間の力の及ばない場所が荒野なのです。だからこそ神に向かって叫び、神からすべてを頂いて生きた場所が荒野でした。逆説的ですが困難だからこそ神が近かったのです。それはやがて約束の地、乳と蜜が流れる地といわれたカナン地方に入って定住し、農耕を始め、栄えるようになると物質文明のなかに取り込まれてゆき、神を忘れるのです。貧富の差が生まれ、同胞を靴一足の値段で売り飛ばすような社会になったとき、預言者は神の言葉として裁きを告げました。その時に、第二の出エジプトを預言した預言者もいたのです。つまり、このカナンの物質文明から再び荒野に脱出して、親しく神との交わりを取り戻して生きることを説いた者がいたのです。それはモノとカネに頼って、神に頼ることを忘れたイスラエルへの裁きであると同時に、新しい生き方への招きでもありました。バプテスマのヨハネが荒野で成長し、荒野の際で悔い改めの洗礼運動を展開したのは、この預言者の流れを汲むものです。彼の説教の内容をルカは記していますが、基本は切り倒す言葉です。斧はすでに木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる、とヨハネは告げています。そしてではどうしたらよいかと訊いた人々に具体的に下着を2枚持っている者は一枚も持たないものに分けよ、とか。規定以上に取り立てるなといった社会的公正の観点から分かち合いを求めています。これは義と公正を説いた預言者の王道です。しかし、彼は自分はメシアではないと明言しました。イスラエルがメシアを待望していることをよく知ってい

ましたが、彼は自分がメシアのために道備えをする者であり、自分よりも優れた方が来られると、正しく自分の働きを理解していました。やはり洗礼者ヨハネの行動は荒野を出なかったのです。それは地理的な場所の限定だけにとどまりません。預言者とメシアの違いがよくわかる記事が、ルカによる福音書 13 章にあります。これはルカの特長記事です。「悔い改めなければ滅びる」という小見出しがついています。これは洗礼者ヨハネと同じですね。確かに、この勧めは神の律法に則ったものなのですから、基準そのものが揺らぐことはありません。律法は正しい道をわたしたちに指し示すものゆえに尊いのです。問題は、その正しい道をわたしたちが歩めないことなのです。違反は当然罰を招くでしょう。その理由はわたしたちの自己中心性であったり、神の教えを正しく認識できないわたしたちの中にある罪のゆえなのですが、それは裁きの対象になるゆえに良い実を結ばない木は切り倒されて火の中に投げ入れられると洗礼者ヨハネもイエスさまも語るのです。しかし、キリストは結果が違うのです。13 章で「悔い改めなければ滅びる」と語ってすぐに続けて「実のならないいちじくの譬え」をお語りになるのです。この箇所は解き明かし位はすでにしてありますが、要するに、果樹園に植えて規定の年数、世話をしても実らないいちじくの木を場所ふさぎだから切り倒せと主人が言うのに対して、園丁が今年もそのままにしておいてください。木の周りを掘って肥やしをやってみます、そうすれば来年は実がなるかもしれません。もしそれでも駄目なら切り倒して下さい、と執り成すのです。これは父よ、彼らをお赦してください。彼らは自分が何をしているのか分からないのです、と祈られたキリストと同じです。キリスト・イエスは荒野ではなく、わたしたちの生活の場に入ってこられ、ともに働かれ、そして執り成される

方です。ここにキリストの新しさがあります。しかも、わたしたちは知っています。実らないいちじくの木に代わって、木が切り倒されるのではなく、園丁が身代わりとなって切り倒され、わたしたちと神の間にあった障害、罪を取り除かれるのです。ことがらを全く新しいステージに進めてくださった。この十字架の御業こそがメシアの働きであり、神の正しさを表すと同時に、わたしたちに示された愛そのものであるのです。このような出来事をイエスさまがなされることを洗礼者ヨハネはついに知ることなく世を去ることになります。しかし彼は確かに正しくバトンをイエスにつないだのです。自分より優れた方が来られる。この発言は、時間的能力的に限界をもって、この世界に生きるわたしたちがわきまえておく必要のあることです。神は、それがみ心にかなった業であるならば必ず、その働きを先へと進めてくださる方だということです。荒野ではなく、わたしたちの生きる場で共に働くためにキリスト・イエスは人里で育たれ、そして、神と人のための働きを執り成す者として生き抜かれるのです。その働きに尽きることのないわたしたちへの愛があります。

お祈りいたします。